

房総半島におけるヤマビルの発生予測

山中征夫・山中千恵子（東大千葉演）

I はじめに

ヤマビルは環形動物門に属し、日本産ヒル類のなかでは唯一の陸生吸血種である。房総半島では1985年頃からヤマビルの大量発生が認められ、農林業等の野外作業における人的吸血被害が頻発している。防除対策を考える上でヤマビルの個体群変動要因の解明は重要であり、これまでに得られた知見から、ヤマビルにとってニホンジカは好適な寄主動物であると同時に運搬者であることが判明した(1, 3)。そこで、ヤマビルの発生地域におけるニホンジカの生息状況から、ヤマビルの発生予測を試みた。

II 方法

ニホンジカの分布域及び生息状況を推定するため、千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会の「千葉県房総半島におけるニホンジカの保護管理に関する調査報告書」を参考に、また、関係者からの聞き取り調査を行った(2)。つぎに、ヤマビルの生息状況を明らかにするため、ヤマビルの大量発生が認められる鴨川市（旧天津小湊町）内に固定調査地を設け、1991年から月1回定期的にヤマビルの採集を行った。また、同じ調査地内の石の下などに潜んでいる吸血済みと思われる個体等を週1回採集した。さらに、気象条件がヤマビルの生息状況に及ぼす影響についても調査した。

III 結果と考察

関係資料等から推定されたニホンジカとヤマビルの分布域の推移を図-1に示す。ニホンジカの分布域の増加に伴いヤマビルの分布域の拡大がみられた。つぎに、ヤマビルの固定調査地を含む周辺のニホンジカの生息密度と固定調査地で採集された年採集個体数との関係を図-2に示す。ヤマビルの採集個体数とニホンジカの生息密度との間には強い相関がみられた。千葉県及び鴨川市によるニホンジカの有害駆除等によって、ニホンジカの生息密度は減少しているが、それでもニホンジカの生息密度が10頭/km²を超える地域では、ヤマビルの大量発生が続いている。ヤマビルは乾燥に弱い、1995年8月や2001年7月などの極端な夏季の渇水期、月の降水量が

10mm以下の気象条件でも、落ち葉の下などの比較的に湿度の高い所に隠れ、生存にはほとんど影響がないように思われた。

千葉県では2005年に著しく増加したニホンジカに対して、「特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ）」を策定して、農林業被害の軽減や自然植生の保護のため、ニホンジカの個体数調整を行っている。しかし、地形が複雑で急峻な丘陵地での捕獲は難しく、捕獲目標頭数の達成には至っていない。繁殖力が強く、天敵が不在のなかで、ニホンジカの生息密度が高い地域では、当分の間、ヤマビルの大量発生は続くものと予測された。

IV おわりに

ヤマビルにとって好適な寄主（吸血対象）動物であり、かつ運搬者でもあるニホンジカの分布域の拡大及び個体数の増加が続いているため、今後もヤマビルの大量発生が続くことが予測される。残念ながら、当面は塩靴下等の忌避剤を適切に使用して、対象療法的な方法で人的被害を軽減していくことが最良の方法であると思われる。幸いに、ヤマビルの体内には病原菌等の存在が確認されていないので、傷口からの二次感染を防ぐことが特に重要である。

引用文献

- (1) 浅田正彦・落合啓二・山中征夫（1995）房総半島におけるニホンジカに対するヤマビルの寄生状況，千葉中央博自然誌研究報告3（2）：217～221
- (2) 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会（1993-2005）千葉県房総半島におけるニホンジカの保護管理に関する調査報告書1～13
- (3) 山中征夫・山中千恵子・稲村宏子・山根明臣（2005）森林における大型哺乳類の生息状況とヤマビルの個体数，日林学術講116：81

Ikuo YAMANAKA and Chieko YAMANAKA (Univ. Forest in Chiba, Grad. School of Agric. and Life Sciences, The Univ. of Tokyo, Chiba 299-5503

Prediction of the occurrence of the blood sucking land leech, *Haemadipsa zeylanica japonica* (Gnathobdellida : Haemadipsidae), in the Boso Peninsula, Chiba Prefecture

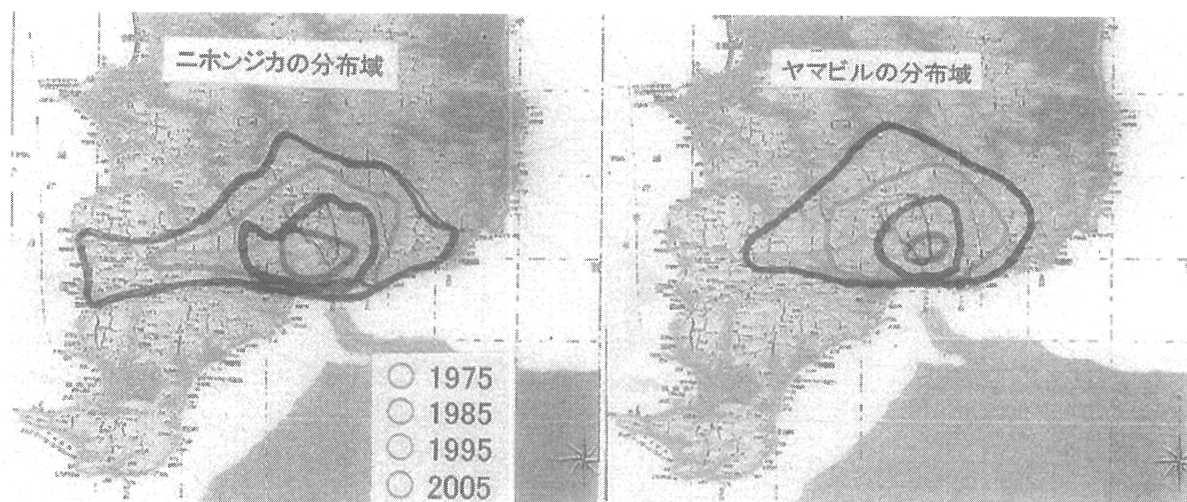


図-1 ニホンジカとヤマビルの分布図

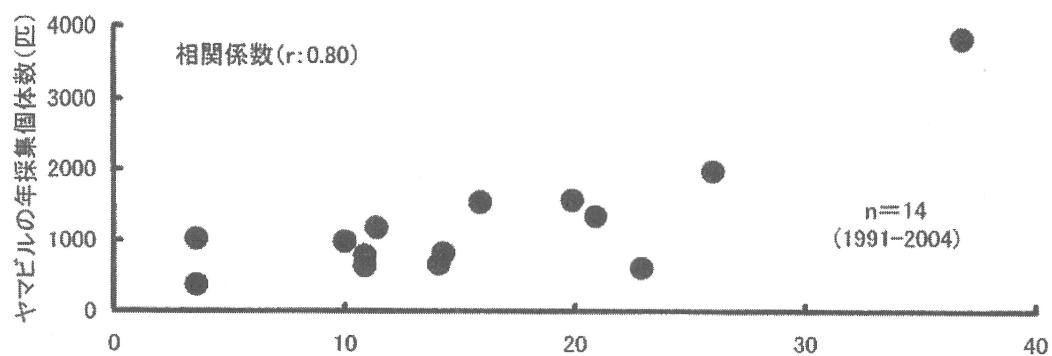


図-2 ニホンジカの生息密度とヤマビルの年採集個体数



図-3 ニホンジカの分布域内の高密度地域